

元気創造研究センター 年 報

平成 27 年度

星 城 大 学

目次

目次

1. 元気創造研究センターの概要	2
2. 平成 27 年度の実施事業	
2-1. シンポジウムの概要と実施報告	3
2-1-1. 連続シンポジウム：第 3 回「少子高齢化社会をしなやかに生きる」	4
2-1-2. 連続シンポジウム：第 4 回「里山から始まる「ゆたかな」社会」	5
2-1-3. 連続シンポジウム：第 5 回「21 世紀型「ゆたかな社会」構築に向けて」 ...	6
2-2. 助成研究の概要	
2-2-1. 研究助成募集要項	7
2-2-2. 自分づくり領域①	9
2-2-3. 自分づくり領域②	13
2-2-4. 健康増進領域①	18
2-2-5. 健康増進領域②	22
2-2-6. 健康増進領域③	25
2-3. 平成 27 年度助成研究報告会	30
2-4. 平成 28 年度助成研究募集説明	32
2-5. 科学研究費申請説明会	35
3. 広報活動	36
編集後記	37

1. 元気創造研究センターの概要

1. 元気創造研究センターの概要

元気創造研究センターは、活力のある地域づくりや健康で文化的な市民生活の実現、行動力に富んだ学生の育成につながる研究などの推進を図る拠点として、平成 23 年 4 月に開設されました。地域と積極的に連携しつつ様々な研究的アプローチから「地域や市民・学生が元気になる」研究活動を展開し、地域社会や学生にその成果を還元することを目的としています。

当センターでは、研究者個々人の自律的な研究活動を尊重し、その上で大学全体として調和を保ち相乗効果をもたらすような研究を推進するため、ホロニックな（包括的な）運営を行います。具体的な運営の基本方針として、次の 3 点を掲げています。

- ① 「知の拠点」としての研究活動の高度化・活性化
- ② 研究成果の学生・地域社会への還元
- ③ 学内外に開かれた運営

当センターの設置目的を達成するため、学際的な共同研究や地域の関係者との共同研究などに対する助成を行うほか、競争的資金の獲得に向けた支援を行います。また、地域社会や学生に対して研究成果を還元するために、講演会や学術研究発表会などを開催します。

これらの活動を通して、当センターでは、元気な地域社会の実現に向けた研究活動を積極的に推進していきます。

2. 平成 27 年度の実施事業

- 2-1. シンポジウムの概要と実施報告
- 2-2. 助成研究の概要
- 2-3. 平成 27 年度研究報告会
- 2-4. 平成 28 年度助成研究募集説明
- 2-5. 科学研究費申請説明会

シンポジウムの概要と実施報告

2-1. シンポジウムの概要と実施報告

2014-2015 星城大学元気創造研究センター

連続シンポジウム

統一テーマ

21 世紀型「ゆたかな社会」を求めて

第 1 回 2014 年 11 月 2 日（日）午後 1 時 30 分～

「芸術・文化を生活に活かす」

基調講演：作曲家 青島広志 氏

第 2 回 2014 年 3 月 7 日（土）午後 1 時 30 分～

「食と農を通してゆたかな社会を考える」

基調講演：東京農業大学 名誉教授 小泉武夫 氏

第 3 回 2015 年 5 月 30 日（土） 午後 1 時 30 分～

「少子高齢化社会をしなやかに生きる」

基調講演：国立社会保障・人口問題研究所 名誉所長 西村周三 氏

第 4 回 2015 年 10 月 3 日（土） 午後 1 時 30 分～

「里山から始まる「ゆたかな」社会」

基調講演：日本総合研究所調査部 主席研究員 藻谷浩介 氏

第 5 回 2015 年 12 月 5 日（土） 午後 1 時 30 分～

「21 世紀型「ゆたかな社会」構築に向けて」

基調講演：京都大学 名誉教授 橘木俊詔 氏

会場：星城大学 4 号館

2-1-1. 連続シンポジウム：第3回「少子高齢化社会をしなやかに生きる」

SEIJOH UNIVERSITY 星城大学元気創造研究センター

連続シンポジウム
21世紀型「ゆたかな社会」を求めて
むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく

基調講演
国立社会保障・人口問題研究所名誉所長 **西村 周三 氏**

**『少子高齢化社会を
しなやかに生きる』**
2015年5月30日(土) 13:30～

日時 13:00 開場 場所：星城大学4号館
13:30～第一部：基調講演
第二部：パネルディスカッション
パネリスト 中日新聞・編集局長 臼田 信行氏
星城大学学長 赤岡 功

第3回

16:00 終了予定

温かい心と冷静な頭脳で切り拓く日本の未来

▶西村 周三氏 プロフィール
▶国立社会保障・人口問題研究所名誉所長、京都大学名誉教授、
医療経済学会初代会長
▶著書：『医療と福祉の経済システム』『保険と年金の経済学』他多数。

連続シンポジウム第3回が星城大学4号館で去る5月30日(土)午後、満員の聴衆の参加を得て開催されました。

第1回と第2回は、「芸術と文化」、「食と農」をキーワードに21世紀の「ゆたかな社会」を探ってきましたが、今回は私たちの社会が抱える最大の課題と言っても過言ではない、少子化と高齢化の進む日本社会をテーマに、国立社会保障・人口問題研究所名誉所長の西村周三氏をお招きして、開催されました。

第一部の基調講演では、少子高齢化の進む社会の現状や近い将来予想される社会状況、

さらにそれらに柔軟に対応するために必要な私たちの価値観やライフスタイルについて、白熱の講演が展開されました。

第二部では、西村氏と中日新聞編集局長臼田信行氏、本学学長赤岡功が参加し、3氏による公開討論が行われました。臼田局長からは、少子化を食い止めるには、多様な生き方や働き方を認める社会への転換が必要ではないか、との問題提起がありました。また、女性の社会進出は出産を抑制していないことが、西欧諸国のデータをもとに指摘されていました。

さらに西村氏からは、少子高齢化の進展によって今後公的負担の増大は避けられないが、しかし地域の支え合いの復興によって負担上昇を抑制する可能性の高いことが指摘されました。

参加いただいた多くの行政担当者および市民の皆さま、最後まで熱心にご聴講いただき、誠にありがとうございました。

次回は、10月3日(土)午後1時30分より「里山から始まる『ゆたかな社会』」と題し、日本総合研究所調査部主席研究員藻谷浩介氏をお招きして開催されます。皆さまのご参加を心からお待ちしております。

大学 Web サイト新着情報より転載 (<http://www.seijoh-u.ac.jp/news/2015/06/17/post-166.html>)

2-1-2. 連続シンポジウム：第4回「里山から始まる「ゆたかな」社会」

SEIJOH UNIVERSITY 星城大学元気創造研究センター
連続シンポジウム
21世紀型「ゆたかな社会」を求めて
むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく
基調講演
日本総合研究所 調査部 主席研究員 **藻谷 浩介氏**
「里山から始まる『ゆたかな社会』」
日時 **2015年10月3日(土) 13:30～**
13:00 開場 場所：星城大学4号館
13:30～第一部：基調講演
第二部：パネルディスカッション
パネリスト 中日新聞東京本社・取締役 論説主幹 深田 実氏
星城大学学長 赤岡 功
16:00 終了予定
知多半島における「里山資本主義」の可能性を探る
➤藻谷 浩介氏 プロフィール
➤ まちづくり、地域振興、産業振興、人口成熟問題が専門。
➤ 平成合併前の3200市町村のすべてと海外60カ国を私費で訪問。地域特性を多面的かつ詳細に把握。現場目線からの経済分析、地域レポートを発表。
➤ 著書：『デフレの正体』『しなやかな日本列島のつくりかた』『里山資本主義』

連続シンポジウム第4回が10月3日(土)開催されました。

星城大学元気創造センター主催、21世紀型「ゆたかな社会」を求めて第4回は、日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介氏をお迎えし「里山から始まる『ゆたかな社会』」をテーマに開催されました。

第一部の基調講演では、藻谷氏より里山の資源を利用した観光や、地元材を使った21世紀型木材建築の事例が紹介され、里山に基盤

を置くビジネスの将来性が語られました。また日本の国際収支のデータを紹介しながら、国際収支改善には、省エネルギーが重要であること、さらに文化による新たな魅力創造の重要性についても言及されておりました。

第二部では、東京中日新聞論説主幹の深田実氏にパネリストとして参加していただき、里山（資本主義）を「小さな、持続する共同体」（持続可能性）という観点から、その重要性を論じていただきました。

その後の公開討論では、

1. 持続するちいさな共同体としての「里山資本主義」をグローバル化する経済の中でどのように共存させるか
 2. 都会生活者が里山的生き方を実践するにはどうしたらよいか
 3. さらに知多半島を独立国としてとらえたとき、自給自足はどの程度可能か
- という3つの観点から議論がなされました。

討論では、日本社会を多様性に富んだ社会に変えていくことが重要であり、国際競争力強化を目指すフォワードと公共事業を受け持つゴールキーパーだけでチームを作るのではなく、中盤で汗をかきながら走り回るミッドフィルダーを育てあげ、グローバル化する経済の中で、里山資本主義的生き方を共存させることが重要である。また里山的生き方によって多様性のある文化を作り上げ、今までとは違った魅力を生み出すことの重要性などが論じられました。

大学 Web サイト新着情報より転載 (<http://www.seijoh-u.ac.jp/news/2015/10/22/post-202.html>)

2-1-3. 連続シンポジウム：第5回「21世紀型『ゆたかな社会』構築に向けて」

SEIJOH UNIVERSITY
元気創造研究センター連続シンポジウム 2014-2015
最終回



基調講演
京都大学 名誉教授 **橘木 俊詔** 氏
「『ゆたかな社会』構築に向けて」
日時 **2015年12月5日(土) 13:30～**
13:00 開場 場所：星城大学4号館
13:30～第一部：基調講演
第二部：パネルディスカッション
パネリスト 中日新聞・取締役編集局長 臼田信行氏
中日新聞東京本社・取締役論説主幹 深田 実氏
星城大学学長 赤岡 功
16:00 終了予定

「新しいはたらき方」と「シンプルなゆたかさ」への提言
橘木 俊詔氏 プロフィール
➢ 実証経済学の第一人者。幸せとは何かを経済学の立場から研究。
➢ 日本における格差問題をいち早く指摘。
➢ 著書：『格差社会』『女性格差』『「幸せ」の経済学』など多数。

12月5日(土)、連続シンポジウム「21世紀型『ゆたかな社会』を求めて」最終回が、日本を代表する経済学者の一人である京都大学名誉教授橘木俊詔先生を基調講演者にお迎えして開催されました。橘木先生の基調講演は「『ゆたかな社会』構築に向けて」をテーマに、以下の要旨で展開されました。

・近年、日本の経済は低いながらも成長しているが、日本人の幸福度は低下しつづけている。

- ・成熟社会にある日本では、経済成長はほどほどにして、心のゆたかさの成就を目標とした。
- ・経済成長は必然的に格差を拡大するという宿命にある。
- ・しかし経済の効率化と公平性は、やり方によっては同時に達成することも可能である。
- ・その好例は現代の北欧諸国にみられる。
- ・日本も公平で効率的な社会を目指したい。

基調講演に続いて、臼田信行中日新聞編集局長、深田実中日新聞論説主幹のお二人と橘木先生との公開討論が行われました。

臼田局長からは、「会社社会」から「市民社会」へ、深田主幹からは、「ゆたかな時代」に望まれる「はたらき方」をテーマにご提言がありました。

その後の討論では、1.安全、安心で公平な社会実現にむけて、2.定常型社会における新たな需要の創造、3.グローバル化の進む21世紀社会における「こころのゆたかさ」と「はたらき方」などをテーマに討論が行われました。

結論として、21世紀の「ゆたかな社会」とは、日本人のはたらき方を見直し、家庭、地域、環境、自然に一層配慮し、かつ安全、安心、公正な社会の構築が望まれること。それが結局、経済の効率性にもプラスに作用することで意見の一致をみました。

連続シンポジウム最終回となった今回は400名を超える皆さまにご参加いただきました。最後まで熱心にご聴講いただいた皆さま、ありがとうございました。

大学 Web サイト新着情報より転載 (<http://www.seijoh-u.ac.jp/news/2015/12/17/21-3531.html>)

助成研究の概要

2-2-1. 研究助成募集要項

1) 助成の趣旨

元気創造研究センターでは、「地域や市民・学生が元気になる」研究活動を展開し、大学のプレゼンスを高める取り組みを支援します。

今回は教育に関連する「自分づくり教育領域」、健康支援に関連する「健康支援領域」、地域の伝統文化やまちづくりに関連する「地域文化力領域」、グローバル化の視点でのあるべき地域社会を提言する「グローカル社会領域」、高等教育機関の役割強化を促進する「知識基盤社会領域」での研究を助成し、活力のある地域づくりや健康で文化的な市民生活を実現、行動力に富んだ学生の育成、地域と積極的に連携につながる研究を助成の対象とします。

2) 助成対象領域

いずれの領域においても元気創造につながるものとして、研究プロジェクトのテーマ、目的を設定してください。

重点研究領域	キーワード	領域の目的
自分づくり教育領域	高大連携，初年次教育，キャリア教育等	新しい産業を興し，文化を創造し，グローバルな考えを持って地域社会を担える若者の育成を目指し，建学の精神を具現化する．
健康支援領域	地域健康づくり，介護予防，生活支援等	子供から高齢者の健康増進を図り元気で健康な生活を推進する．
地域文化力領域	伝統文化，ボランティア，まちづくり等	地域の伝統文化資源を見直し，生活に生かすことで地域社会に活力を生み出すことを促進する．
グローカル社会領域	グローバリゼーション，地域産業振興等	政治，経済，文化などあらゆる分野で進むグローバル化の流れを地域の視点で捉えなおし，今後のあるべき地域社会を提言する
知識基盤社会領域	知識経営，ICT，大学の役割等	価値の源泉としての知識の創出を直接的間接的に促す方法を探ることで，地域社会における高等教育機関の役割強化を促進する．

3) 助成期間：平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月（単年度，複数年度（2～3 年））

4) 応募資格

助成申請研究代表者は，星城大学教員とします。

5) 募集スケジュール

公募期間：平成 26 年 12 月 17 日から平成 27 年 1 月 16 日 17：00

公募選定結果発表：平成 27 年 2 月下旬

6) 応募要件（研究推進形態について）

組織的な研究・開かれた研究を推進するため、以下の研究を助成対象とします。

- 1) 両学部あるいは単一学部教員複数名での共同研究
- 2) 地域との共同研究
- 3) 研究の必要性に応じて学外研究者も加えた共同研究

なお、応募に当たっては、8. 応募に当たっての注意事項を参照ください。

7) 審査方法

採択にあたっては、以下の点を総合的に考慮して判断します。

- 1) 応募内容が元気創造研究センターの趣旨に沿っている
- 2) 研究テーマ、研究手法などが独創的、意欲的で且つ水準が高い
- 3) 研究テーマ、研究体制、研究作業計画、予算が研究目的に対して適切である
- 4) 学内外との共同研究である（6. の応募要件を満たすこと）
- 5) 研究計画申請書の審査は、学内の複数名の教員と元気創造研究センター運営委員が行う

なお、必要に応じて、研究代表者に対するヒアリングを行う場合があります。

8) 応募に当たっての注意事項

- 1) 研究計画申請書をファイルにて配布します。申請書の様式は改変せず、フォントは 11 ポイントとしてください（表、図の部分は除く）。当該ファイルの指示・注意事項に従って作成してください。
- 2) 採択研究プロジェクトへの助成期間は 1～3 年とします。ただし、2 年目以降の助成を確約するものではありません。前年度までの研究経過を審査したうえで助成継続の可否を決定します。
- 3) 研究計画書にプロジェクトの最終目標を具体的に明記してください。
- 4) 研究計画申請書に公募研究領域の趣旨との関係を明記してください。
- 5) 研究計画書に成果発表の方法を記載してください。
- 6) 採択されたプロジェクトは、年度末に開催される研究報告会での報告が義務付けられます。
- 7) 複数年度計画で申請し採択の後に予定の研究期間を満了することなく継続申請しない場合には、研究代表者はその理由を書面にて元気創造研究センター長に提出してください。
- 8) 研究成果を複数年以内に論文として報告してもらいます。その場合、星城大学元気創造研究センター助成金（英文：Seijoh University Joint Research Promoting Grant for Community Development）で行った研究であることを記載してください。

2-2-2. 自分づくり領域①

研究題目

学生のコミュニケーション技能向上に向けたプログラム開発と評価に関する研究
(助成期間 2013～2015 年度)

研究代表者

飯塚 照史

分担研究者

今井 あい子、竹田 徳則、綾野 眞理

研究目的

臨床実習（以下、実習）で躰く作業療法学専攻の学生が全国的に増加している。これは単に知識や技術の不足だけではなくコミュニケーション能力が起因しているとの指摘が多い。本研究の目的は、実習に向けて学生自身の気付きと行動変容を促すために構想したコミュニケーション能力向上プログラムを実施し、その効果を検証することである。さらに、実習前後における学生の認知・行動（対応）の変化、応用などのプロセスを明らかにし、学内教育の一環としてのコミュニケーション能力向上に役立つプログラムを開発する。

学生のコミュニケーション技能向上に向けた プログラムの開発と評価に関する研究

飯塚照史, 竹田徳則, 今井あい子, 綾野真理

1

緒言

臨床実習学生の情意領域(態度・習慣)に対する指摘

✓対象者, 指導者との基本的なコミュニケーションが行えない

(奈良 2009, 井上ら 2001, 宮内ら 2005, 岡崎 2002, 内山 2005, 金澤, 山口, 八杉 2011)

- ・職業人としての基本的行動がとれない
- ・ため口
- ・返事が出来ない
- ・指導を批判と捉えてしまう

✓「ゆとり教育」世代の学生の特徴 (高木, 2011)

- ・社会的スキルの不足
- ・意欲・主体性のなさ
- ・表面的な真面目さ
- ・要求の厳しい依存性
- ・打たれ弱さ
- ・現実と乖離した自信

2

学内教育の必要性

✓実習期間内で困難なことやストレスの要因を理解した効果的な教育実践を推奨

(安田ら, 2012)

✓学内教育におけるコミュニケーション能力向上のための指導が求められる

(竹田, 2011)

✓対人コミュニケーション能力や技術の習得を高める支援が必要

(綾野, 2011)

目的

2012年度より開講したコミュニケーション講座と
実習経験による, 学生の意識変容を明らかにし,
臨床実習に向けた講座プログラムを提案すること。

1. 3年次学生に対するコミュニケーション講座実施と実習後の不安傾向の経時的変化(1・2・3年目)
2. 各年度における傾向の比較と講座プログラムの提案(2・3年目)

3

これまでの報告内容

平成25年度

- ・学生の講座方針に対する理解は得られていた。
- ・実習前の知識・技術面に対する不安は高まる傾向にあった。
- ・対象者の沈黙や無視といった状況に対するとまどいがみられた。
- ・コミュニケーションの重要性に対して意識づけが強化された。

平成26年度

- ・指導者との関係性に対する不安が高い傾向であった。
- ・ロールプレイングによる実践的教示が効果的と考えられた。

4

コミュニケーション講座内容

コミュニケーション成立の条件(講義形式)

「Empathy」理解・「社会的スキルの生起過程モデル」・「エゴグラム」

言語・非言語的手段の理解, 性格傾向と態度類型の理解

きく(聞・聴・訊)こと(講義・演習)

「聞・聴・訊の違い」・「会話分析」

会話分析を通じた面接場面における傾聴の理解(解釈モデル)

倫理観とコミュニケーション(講義・演習)

「職業倫理」・「患者対応場面のロールプレイングと討論」

職業倫理の理解, 対応困難場面における倫理的ジレンマの理解

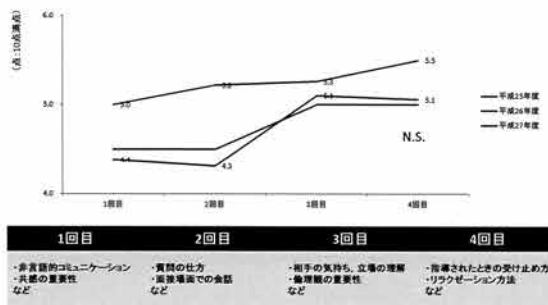
指導者からの指摘と自己管理(講義・演習)

「指導場面のロールプレイング」・「心理的ストレスとその対応」

指導者指摘への対応の重要性, 心理的ストレスとそのサイン

5

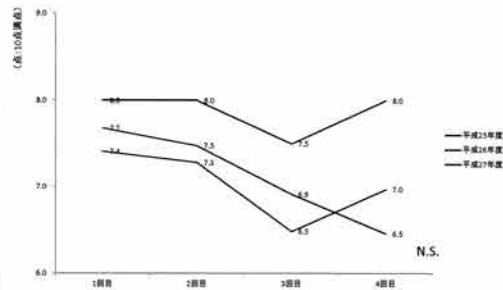
講座はコミュニケーション能力を向上させるか?



統計学的有意差はないものの, 学生の自覚的なコミュニケーション能力が高まる傾向。

6

講座は実習に対する不安を軽減させるか？



平成26、27年度学生は実習直前に不安が高まる傾向

7

実習前の不安と実習Ⅱ得点の相関

年度		セミナー得点 (教員評価)		施設得点 (指導者評価)	
		r	p	r	p
平成25年度	実習前不安	-0.052	0.81	0.401	0.064
	STAI状態不安	-0.067	0.76	0.31	0.13
平成26年度	実習前不安	0.323	0.07	0.137	0.45
	STAI状態不安	-0.499	0.00	-0.91	0.62
平成27年度	実習前不安	0.282	0.20	-0.037	0.87
	STAI状態不安	0.173	0.45	-0.432	0.04

P<0.05

8

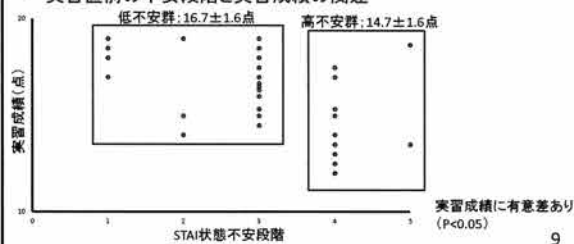
平成26年度3年次学生

・状態不安段階の変化

	実習直前講義後	
	高不安群	低不安群
講座前	6	6
講座後	5	16

McNemar検定: P=0.5

・実習直前の不安段階と実習成績の関連



9

平成26年度3年次学生

・実習直前の不安内容の比較

	高不安群		低不安群	
	件数(件)	相対値(%)	件数(件)	相対値(%)
知識・技術	4	22	3	12
バイザー	4	22	5	19
体調管理	1	6	7	27
環境	0	0	1	4
レポート	3	17	2	8
コミュニケーション	3	17	1	4
緊張	1	6	1	4
評価	1	6	2	8
対象者	0	0	2	8
リスク管理	0	0	1	4
漠然	1	6	1	4

10

実習後アンケート; 高不安群抜粋

・コミュニケーション成功

「緊張したが、良好な関係性が築けた」
「指導者、対象者とも優しく自信につながった」
「質問などに円滑に答えられた」

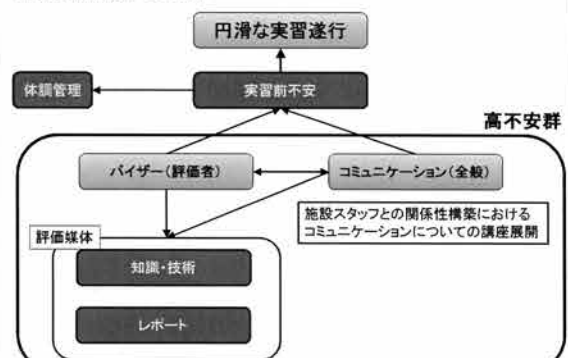
・コミュニケーション困難

「指導者への質問のタイミングが分からなかった」
「対象者に聞いてもいい事の区別が分からなかった」
「寡黙な方とのコミュニケーションで一方的に話してしまっただと感じている」
「分からないという事をうまく伝えられなかった」
「会話を続けられず対象者のニーズが分からなかった」
「(病影の影響により) 話せない対象者とのコミュニケーションが出来ない」
「質問ありますか？と聞かれても思い浮かばず、消極的と思われた」

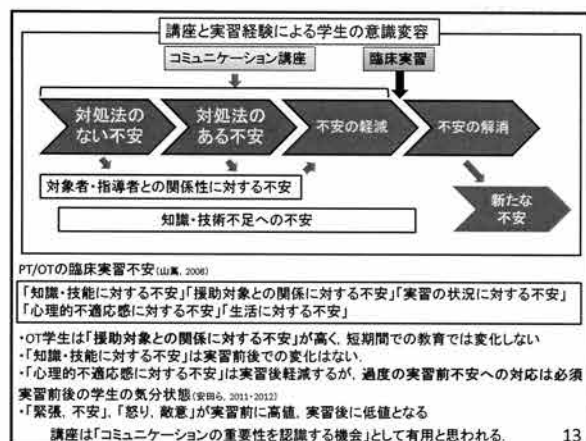
実習経験そのものもコミュニケーション能力を涵養する一方で、困難場面に対する支援も必要

11

臨床実習前学生の状態



12



13

総括

学生の意識変容

- ・“高不安”の学生においては、コミュニケーションだけでなく知識・技術、課題に対しても不安を抱え、成績にも影響する。
- ・実習での成功体験がコミュニケーションに対する自信をつける。

コミュニケーション講座の効果

- ・コミュニケーションに対する意識を向上させる
- ・統計学的には不安軽減、コミュニケーション能力向上は認められない

今後の方針

- ・質的データの解析
- ・新カリキュラムにて講座継続

実績

- ・論文投稿 (1編採択済み・1編投稿後修正中)
- ・情報発信 (学会発表2件・シンポジウム1回開催)

14

2-2-3. 自分づくり領域②

研究題目

反転学習の教材としてのシリアスゲームの最適選択に関する研究
(助成期間 2015～2016 年度)

研究代表者

天野 圭二

分担研究者

野村 淳一、室 敬之

研究目的

本研究は、経営学教育において反転授業（その延長線上に形成が期待される学士力・社会人基礎力を見据えて）を効果的に実践するための方法として、コンシューマ（デジタル）ゲームの中から①教材として利用可能な「シリアスゲーム」を選択するための基準を策定することと、②類似概念であるビジネスゲーム、シミュレーションゲーミングで用いられてきた手法の援用可能性についての整理を行い、反転授業用教材の新分野を開拓することを目的とする研究である。

教育研究部門

反転授業の教材としてのシリアスゲームの最適選択に関する研究

○星城大学 経営学部 天野圭二
 星城大学 経営学部 野村淳一
 星城大学 事務局 室敬之
 (星城大学元気創造研究センター助成研究)

助成期間： 2015～2016年度

研究の履歴と本研究の目的

➤ シリアスゲームを活用した問題解決型演習の運用及び評価方法に関する研究 (2012-2014)

➤ 経営学の体系的な理解やモチベーションの向上など授業の当初の目標はおおむね達成⇒教材としてのゲームの有効性
 どのようなゲームが適切か？

➤ 教材として利用可能なシリアスゲームを選択するための基準を策定すること

➤ ビジネスゲーム、シミュレーションゲーミングで用いられてきた手法の援用可能性について整理を行い、反転授業用教材の新分野を開拓すること

ゲームの選択にあたってのガイドラインの作成

研究経過報告について

↓ 元気創造研究センター研究報告会

➤ 反転授業の教材としてのシリアスゲームの最適選択に関する研究

↓ 本学FD教育改善検討会議

➤ アクティブラーニング、反転授業の導入
 —シリアスゲーム演習を巡って—

↓ Japanese-Finnish Meeting about Game Research Collaboration

➤ Practical Use of Serious Games in Higher Education: Operation and Evaluation

↓ DiGRA Japanでの報告を予定 (本学で開催)

研究助成期間と研究の流れ

研究の流れ	2015年度	2016年度
シリアスゲーム演習単位化	シリアスゲーム演習	
演習運営、評価方法修正と最適化	ゲーム選択に関する聞き取り	ガイドライン提示と最適化
	反転授業に関する先行研究サーベイ	ガイドライン試案提示
学会報告 論文投稿 体験授業実施等	文献調査 研修会参加 研究報告	文献調査 学会報告 論文執筆
準備期間	助成期間	

報告要旨

研究の焦点

➤ 反転授業用教材としてのビデオゲーム利用

✓ 反転授業・アクティブラーニングへの準備

✓ シリアスゲーム演習から得た知見

➤ ゲームの適切な選択・利用にあたってのガイドライン

1: 背景 - 先行研究と現状

2: シリアスゲーム演習の状況 - 2年生後期科目

3: ガイドライン設計における現状と課題 - 定量と定性

4: 今後の課題 - 本年度までの学生のゲーム選択

研究の背景

～経営学教育に対するゲームの活用～

反転授業用教材としてのビデオゲーム

● 反転授業 = 授業と宿題の役割を反転

> 講義・演習 ⇒ 家庭学習 > 知識習得 ⇒ 応用学習	> 家庭学習 ⇒ 講義・演習 > 知識習得 ⇒ 応用学習
---------------------------------	---------------------------------

講義用教材を持ち帰らせ、学習させるだけでは不十分
⇒ 家庭学習に適した教材の「発見」

反転授業用マルチメディア教材としてのゲーム

興味を持たせる技術 > 描写、インタラクション、ルール、直感的なインターフェース、マニュアルいらず、能動的参加	持続的利用を促す技術 > ゴール、自発的参加、即時フィードバック、はまる演出、リワード、段階的学習、自己実現
---	--

シリアスゲームとはどんなゲームか？

なし 利用意図 あり Fujimoto(2007)

開発意図	なし	あり
ゲーム開発企業	1: 一般的なゲーム ■ 娯楽目的のアミューズメントゲーム	2: シリアスゲームプロジェクト ■ アミューズメントゲームの教育目的利用
ゲーム開発企業 + 専門的知見	3: シリアスゲームの用途外利用 ■ 教育的・専門的指導を伴わないゲーム利用	4: シリアスゲーム (+ ビジネスゲーム*) ■ 教育目的のゲームの教育課程での利用

伝統的な経営学教育とビジネスゲーム

伝統的な講義スタイル

理論手法 + ケーススタディ = 経営学教育

座学・演習 討議 実践には不十分な理解

【本研究の着想】
シリアスゲームプロジェクト
カテゴリー2 講義手法を補完するモノとする

経営学の学習に役立つビデオゲーム

小売業 製造業 サービス業 国家経営

ザ・コンビニ ゲーム発展国 できる! GC トロピコ5

経営の全体像をつかむことができる
学んだことや、自分自身のアイデアを試せる

経営上の課題解決に必要なやり方や
考え方を経験的に学ぶ ⇒ シリアスゲーム演習

「シリアスゲーム演習」の状況

愛知学長懇話会 単位互換授業対象授業

シリアスゲーム演習

> 学部2年生の正規科目 1単位科目 2013年度～

ねらい
「経営学の体系を体験的に理解すること」

目標
「自らがゲーム内で直面する場面を、各科目で教えられている経営学の知識を用いて解決・改善すること」

授業スケジュール	
回数	授業内容
1	演習概要説明、目標設定
2	ゲームプレイ（チーム個別指導）
3	ゲームプレイ（チーム個別指導）
4	中間報告、目標再設定
5	ゲームプレイ（チーム個別指導）
6	ゲームプレイ（チーム個別指導）
7	総括報告
8	次クール使用ソフト決定
9	ゲームプレイ（チーム個別指導）
10	ゲームプレイ（チーム個別指導）
11	中間報告、目標再設定
12	ゲームプレイ（チーム個別指導）
13	ゲームプレイ（チーム個別指導）
14	総括報告
15	最終プレゼンテーション
16	最終レポート提出

授業内容の問題点（～2014年度）	
▶ゲーム選択の難しさ ▶仮説の検証に必要なデータが詳しく得られない ⇒事例の蓄積、課題の検討に適したゲーム発掘（ザ・コンビニは2年間のパイロット授業で見出したタイトル） ⇒ゲーム選択のガイドライン作成 ▶ゲームが持つ制約と学習へのヒント ▶ランダムなイベントに過度に神経質になる ⇒正確な分析よりも、経営学の概念を用いた結果の解釈に意識を向けさせるべきだった ▶ゲーム選択のガイドライン作成 ▶学習方法指導（教育学的知見の援用⇒反転学習）	

受講者アンケートより						
設問	回答	2013	2014	2015	計	比率
1 この授業（ゲームを使った学習）により、どちらともいえない経営学の知識が深まりましたか？	座学より深まった	5	2	5	12	92.3%
	い	1	0	0	1	7.7%
	座学の方が良い	0	0	0	0	0.0%
2 授業時間外のゲームプレイ時間を教えてください	平均（時間）	10.7	20	20	15.7	
3 自分で選んだゲームについて、後輩に薦められますか？	薦められる	4	2	5	11	84.6%
	薦められない	2	0	0	2	15.4%
	回答者数	6	2	5	13	
	登録者数	6	9	5	20	
➤ 座学よりも経営学の知識が深まるとする学生が多数 ➤ 授業時間外のプレイ時間は平均15時間 ➤ 1単位科目の文科省指針の課外学習（0.75h×15回=11.25h） ➤ 授業期間中4回の報告に必要な準備時間を加えると、2単位科目の学習時間（1.5h×15回=22.5h）を上回る学生が多い						

受講者アンケートより						
設問	回答	2013	2014	2015	計	比率
4 学習に使用するゲームについて、どれがより学習にふさわしいと思いますか？	決められたゲームを全員で行う	0	0	0	0	0.0%
	いくつかのゲームの中から選択	4	2	3	9	69.2%
	自由に自分で選んだゲームを行う	2	0	2	4	30.8%
5 この授業で難しかったところはどこですか？（複数回答可）	課題（仮説）設定	3	2	0	5	20.0%
	関連授業の探索	3	2	2	7	28.0%
	ゲーム選択	2	0	0	2	8.0%
	ゲームプレイ	2	0	1	3	12.0%
	レポート作成	1	0	2	3	12.0%
	プレゼンテーション	3	0	2	5	20.0%
	グループワーク	0	0	0	0	0.0%
	回答者数	6	2	5	13	
	登録者数	6	9	5	20	
ゲーム選択のガイドラインが必要！						

受講者アンケートより	
設問	回答
6 この授業を受けて、受講前の想像と授業内容はどのように異なりましたか？（特に「ゲームを使って経営学を学習する」という部分に関して）	自分たちで課題を採点点が想像と違った。想像よりも発表の機会が多く、発表の力を身につけることができる。ゲームをやるだけではなく、グループワークにも力を入れた。
7 この授業を通して吸収できたことや成長できたこと、発見できたことは何ですか？	受講前は難しい内容だと思っていたが、グループワークで協力しながら行うことで助けあい、楽しい講義になった。ゲームで検証というものが想像できなかったが、経営学やその他の学問を学ぶきっかけとなったことに驚いている。受講前によく説明を聞いたため、ズレはなかった。
	スライドの作り方。データの再現性の大切さ。人に理解してもらう発表をするためには、自分自身がその事例を深く理解していなければならないので、積極的に学習することができた。
	M. ポーターの理論について検証したことで、一度学んだ内容ではあったが、より一層理解が深まった。
	発表という形で行うことで、理解度が高まったと思う。
	1つの検証に4回のプレゼンのチャンスがあったので、複数回にわたるプレゼンをどのように組み立てればよいのか考え、これを経験できたことは、今後大いに役立つと考えている。

ガイドライン設計における現状と課題	
-------------------	--

先行研究より

50-60年代 アンドリンガー方式、アメリカ経営者協会方式
60-70年代 KS（許斐・柴田）方式、CDI方式

- 狙い→経営の考え方とは何かを体験から学ぶ。理論的な学習による知識取得ではなく、実感から気づき、経営の本質を体得すること

1976年 マネジメントゲームMG 2500社15万人が利用
80年代前半のビジネスゲームの構造は？

↓ 経営教育としてのビジネスゲームの要件 伏見（1984）

- 学習目的の明確さ＝どんなスキルの向上を目指すか？
- ゲームの構成要素＝複雑難解でなく、楽しくシンプル
- 偶然性・意外性＝現実社会同様の非合理性
- フィードバック＝即時性＋考える余裕を与える
- 理論と行動＝行動→実感が理論への理解を生む

19

まとめ：ガイドライン設計における課題

課題1：定量的な要素についての検討

- パラメータ：変更可能項目
- ステータス：能力・設備に関する項目、変更不可
- パフォーマンス：結果に関する項目、変更不可

その他：UI、難易度、必要プレイ時間、必要プレイヤー数

➢ 事例の蓄積が乏しく、限られた材料からしか検討が進んでいない⇒ビジネスゲームでの蓄積を利用

課題2：定性的な要素についての検討

- 対象の質的側面に着目した学習には不向き？
- インタビュー、参与観察、会話分析が事実上困難

➢ 決まった答えしか返ってこない⇒AIの進化待ち

20

事例紹介

↓ Dental Implant Simulation Programme



↓ Pulse!



BREAKAWAY

21

事例紹介

↓ 心止村湯けむり事件簿@日本循環器学会



22

事例紹介

↓ 「戦略にこそ戦略が必要だ」ボストンコンサルティング



攻略のヒント

ライバルたちを打ち負かすには、顧客がもっとも集中する地点に、あなたのレモネード・スタンドを設置することだ。

22

2-2-4. 健康増進領域①

研究題目

筋音図と筋電図を用いた嚥下関連筋機能評価と、その嚥下リハビリテーションへの応用
(助成期間 2013～2015 年度)

研究代表者

久保 金弥

分担研究者

三田 勝己、伊東 保志

研究目的

わが国では、人口が高齢化して 65 歳以上の肺炎の発症が増加するに伴って嚥下障害が重要視され、嚥下障害の発見や評価の方法についての検討が進められている。一方、近年、筋機能評価のための指標として、従来の筋電図に加えて、新たに筋音図なる信号が注目を浴びている。本研究の目的は、筋音図と筋電図を用いた嚥下関連筋の機能評価の可能性を明らかにし、嚥下障害の、簡便で、かつ、定量性・客観性を有する新しい検査・評価法を確立することであり、最終的には嚥下リハビリテーション効果の評価への適用を目指す。

筋音図と筋電図を用いた嚥下関連筋機能評価と その嚥下リハビリテーションへの応用

～ 第三報 ～

研究代表者 久保金弥 (星城大学)
分担者 三田勝己 (星城大学／中部大学・生命健康科学研究所)
分担者 伊東保志 (愛知県心身障害者コロニー)
協力者 藤原 周 (朝日大学)
協力者 浦田裕介 (朝日大学)
協力者 安林幹翁 (中部大学)

1

本研究の背景

死因順位別死亡数の年次推移

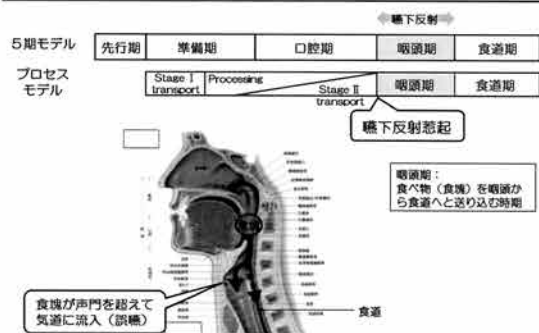
死因 順位	平成15年 (2003)	20年 (2008)	25年 (2013)	26年 (2014)	27年 (2015)
第1位	悪性新生物 309 543	悪性新生物 342 963	悪性新生物 364 872	悪性新生物 368 103	悪性新生物 370 000
第2位	心疾患 159 545	心疾患 181 928	心疾患 196 723	心疾患 196 925	心疾患 199 000
第3位	脳血管疾患 132 067	脳血管疾患 127 023	肺炎 122 969	肺炎 119 650	肺炎 123 000
第4位	肺炎 94 942	肺炎 115 317	脳血管疾患 110 347	脳血管疾患 114 207	脳血管疾患 113 000

注：平成20年までは確定数、平成27年は推計数である。

- ・肺炎による死亡者のうち、約97%が65歳以上の高齢者である。
- ・高齢者の肺炎は、誤嚥による肺炎（誤嚥性肺炎）が多い。

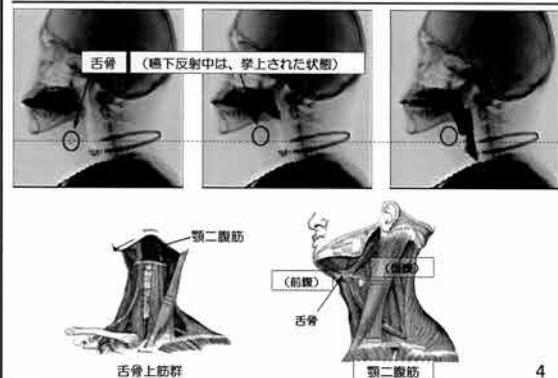
2

摂食嚥下のモデルと誤嚥



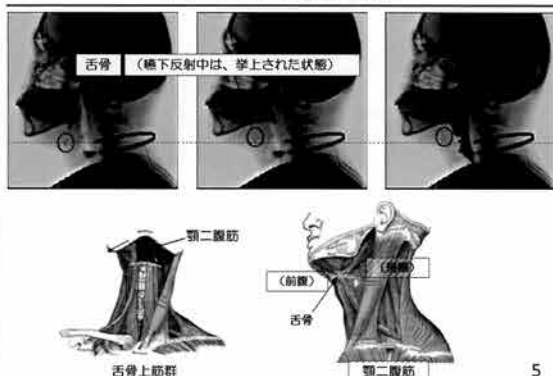
3

嚥下反射中の舌骨の動き



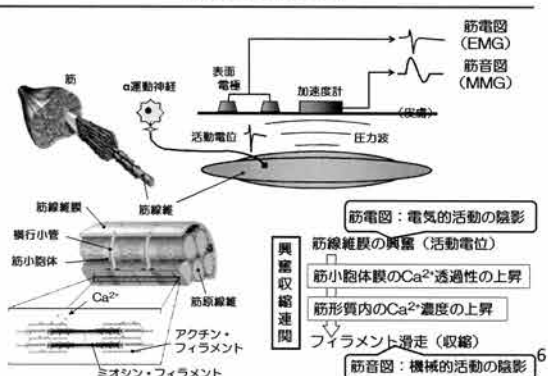
4

嚥下反射中の舌骨の動き



5

筋電図と筋音図



6

目的

本研究の全体目的は、①筋電図と筋音図を用いた嚥下関連筋の機能評価の可能性を明らかにし、②嚥下障害の、簡便で、かつ、定量性・客観性を有する新しい検査・評価法を確立することであり、③最終的には、嚥下リハビリテーションの効果評価への適用を目指す。

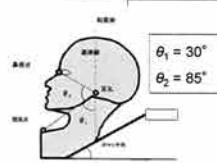
一、二年目の成果：

筋電図と筋音図の積分値が食品の種類・量と相関を持つことを明らかにし、筋電図・筋音図による顎二腹筋の機能評価の可能性を示した。
新しい嚥下機能評価の指標として、筋電図と筋音図の積分値の比 (iMMG/iEMG) を提案した。

本年度は、昨年提案した筋電図と筋音図を利用した新しい評価指標 (iMMG/iEMG) の振る舞いを明らかにするとともに、嚥下機能評価における有効性を検討する。

7

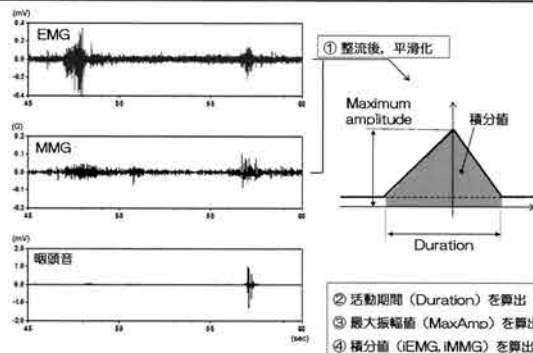
実験風景



試験に用いた食品 (各5ml) :
① 飲むヨーグルト (117.6 N/m²)
② ペーストA (653.7 N/m²)
③ ペーストB (1250.7 N/m²)
④ プリン (1579.2 N/m²)

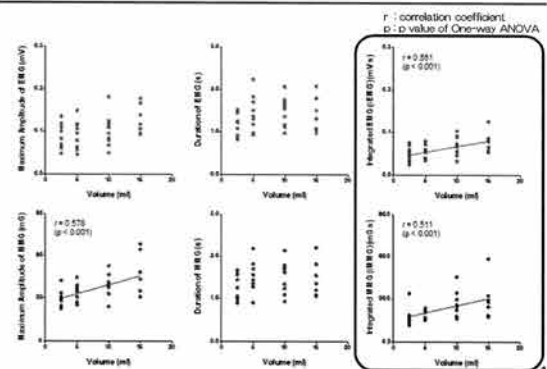
8

記録波形



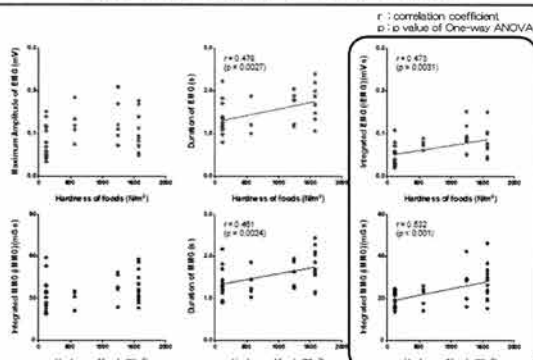
9

食品の量と筋電図・筋音図の関係



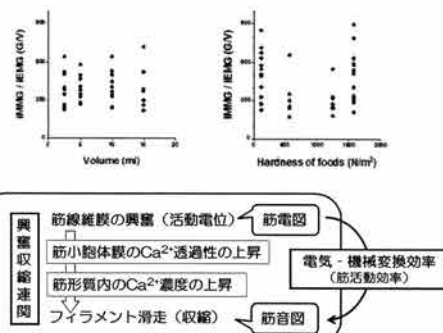
10

食品の硬さと筋電図・筋音図の関係

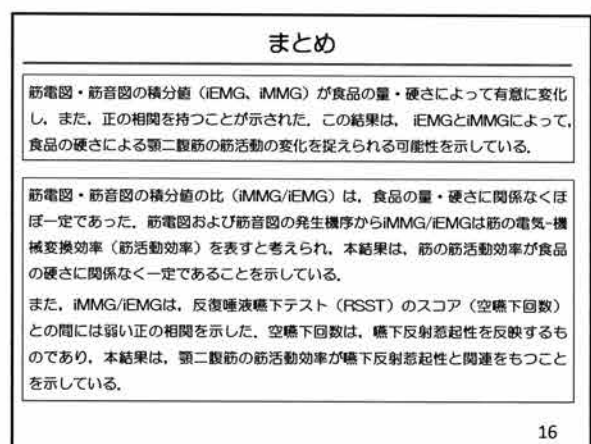
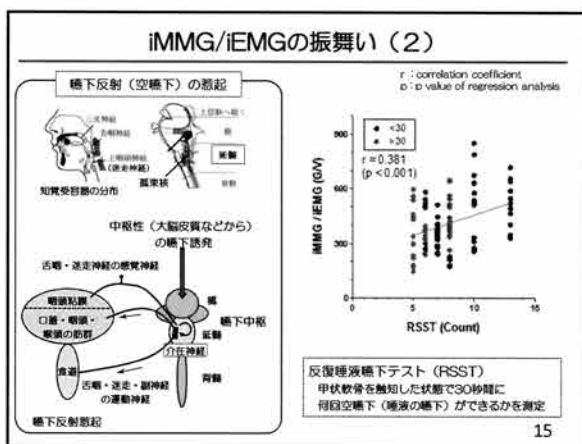
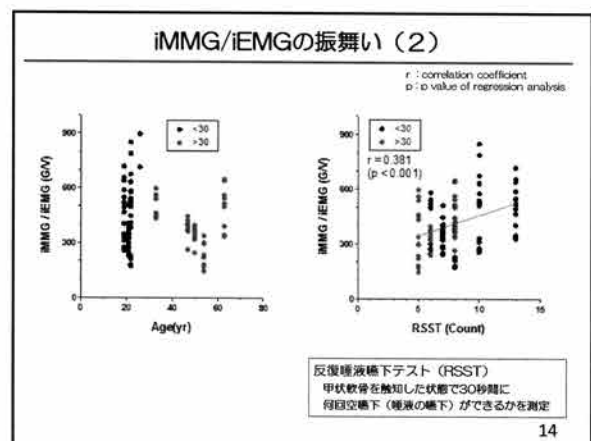
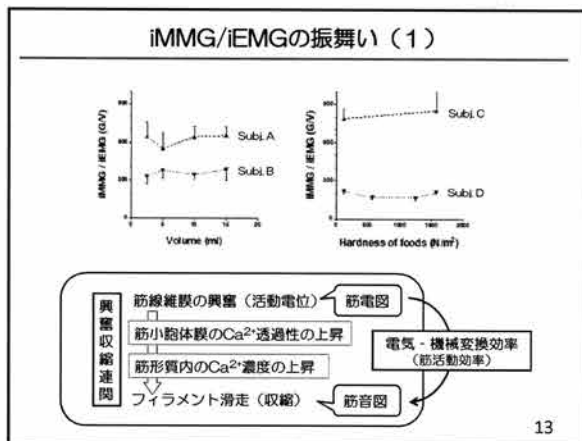


11

iMMG/iEMGの振る舞い (1)



12



2-2-5. 健康増進領域②

研究題目

憩いのサロン事業を活用した認知症予防効果に関する研究
(助成期間 2015～2016 年度)

研究代表者

竹田 徳則

分担研究者

木村 大介、引地 博之

研究目的

介護予防・認知症予防（以下、認知症予防）は、世界的な課題である。認知症の発症には、生物学的側面のみでなく生活行為で欠かせない会と組織やボランティアなど社会参加と社会的ネットワークやサポートの心理社会的側面との関連が明らかにされている。しかし、これらに着目した予防的視点での地域介入とその効果の検証はなされていない。本研究の目的は、地域住民が運営主体の「憩いのサロン」（以下、サロン）事業への参加の有無と要介護認定データとの分析を行うことで、認知症予防に資するサロンの効果を明らかにする。

憩いのサロン事業を活用した 認知症予防効果に関する研究

研究代表者: 竹田徳則 星城大学リハビリテーション学部
研究分担者: 木村大介 星城大学リハビリテーション学部
研究分担者: 引地博之 Visiting Scientist, Harvard T.H.CHAN
School of Public Health

1

背景

- 認知症は世界的に増加が推計され予防策の構築が課題
- 社会的要因も認知症発症リスクだが、これに着目したポピュレーション戦略による地域介入研究はない

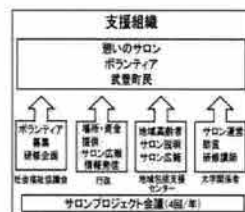
認知症の危険要因と保護的要因



2

背景

- 愛知県武豊町にて2007年から「憩いのサロン」事業で地域介入研究を実施継続中

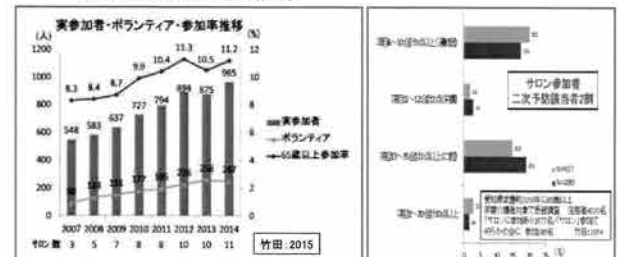


3

平成27年度の研究成果

- 武豊町データを用いた研究

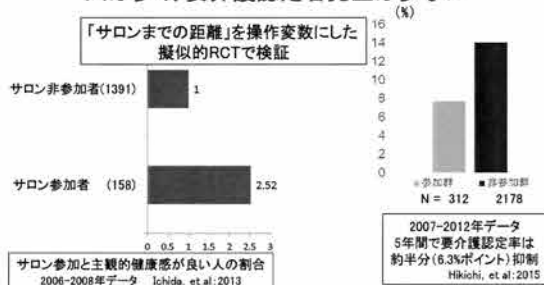
サロンの拠点数も参加者も増加中



4

背景

- これまでサロン参加で心理社会面の良好な改善を報告
- 例えば、サロン参加者群で主観的健康感が良い人は多く、要介護認定者発生は少ない

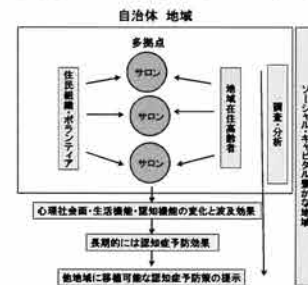


要介護者の6割は認知症ランクⅡ以上 ⇒ 認知症予防も期待できる?

5

研究目的

- 追跡データで参加群と非参加群とで認知症発症割合は異なるか?を明らかにする



本研究は、星城大学研究倫理審査委員会の承認済み(承認番号2015C0013)

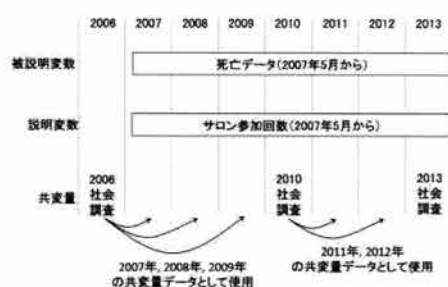
6

研究方法



7

データセットの構造



結果

(認知症発症 参加 66/631 非参加 251/1,962)

	Odds	95% CI		p
参加回数 (ln(X+1))	0.72	0.58	0.90	< 0.01
性別				
女性 (Ref.: 男性)	1.06	0.79	1.41	0.70
年齢 (Ref.: 65歳~74歳)				
75歳以上	6.29	4.86	8.51	< 0.01
教育歴 (Ref.: 9年以下)				
10年以上	0.73	0.57	0.94	0.01
等価所得 (Ref.: 200万円未満)				
200万円以上	1.01	0.73	1.39	0.96
併存疾患数 (脳卒中・心臓病・高血圧) (連続変量)	1.22	0.96	1.55	0.10
飲酒の有無 (Ref.: 無)				
有	0.90	0.59	1.37	0.59
喫煙の有無 (Ref.: 無)				
有	1.39	0.93	2.05	0.10
歩行時間 (1: 30分未満 - 4: 90分以上) (連続変量)	0.84	0.70	1.01	0.07
Cons.	0.01	0.01	0.02	< 0.01

11

研究方法

方法

- ・研究デザイン: 準実験法 コホート研究
- ・分析 3時点データ及び要介護認定データ使用
 - ・目的変数: 認知症(ランクⅠ以上)を伴う
要介護認定発生
 - ・説明変数: サロン参加回数(参加者名簿利用)
 - ・共変量 : 性別・年齢・教育歴・所得・治療中疾患・
飲酒・喫煙・歩行時間
 - ・欠損データ: 多重代入法でデータ生成
 - ・離散時間ロジスティック回帰分析
 - ⇒年度によって参加回数の多少は異なる
本分析で参加回数の推移と目的変数との
関連を捉えることが可能

8

結果

	2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
転帰の発生(観測可能)														
無し	2,556	98.6	2,484	98.7	2,374	98.8	2,250	97.8	2,100	97.1	1,904	96.9	1,842	97.3
有り	37	1.4	32	1.3	30	1.3	50	2.2	62	2.9	63	3.1	43	2.3
計	2,593	100	2,496	100	2,404	100	2,300	100	2,168	100	2,027	100	1,885	100
サロン参加														
無し	2,357	90.9	2,346	90.5	2,324	89.6	2,297	88.6	2,299	88.7	2,273	87.7	2,298	88.6
有り	236	9.1	247	9.5	269	10.4	296	11.4	294	11.3	320	12.3	295	11.4
計	2,593	100	2,593	100	2,593	100	2,593	100	2,593	100	2,593	100	2,593	100
性別														
男性	1,306	50.4	-	-	-	-	874	48.4	-	-	-	-	665	1,306
女性	1,287	49.6	-	-	-	-	895	50.6	-	-	-	-	687	1,287
計	2,593	100	-	-	-	-	1,769	100	-	-	-	-	1,352	2,593
年齢														
55歳-74歳	1,770	68.3	-	-	-	-	910	51.4	-	-	-	-	387	28.6
75歳以上	823	31.7	-	-	-	-	859	48.6	-	-	-	-	965	71.4
計	2,593	100	-	-	-	-	1,769	100	-	-	-	-	1,352	100
教育歴														
9年以下	1,405	54.8	-	-	-	-	1,405	54.8	-	-	-	-	1,405	54.8
10年以上	1,158	45.2	-	-	-	-	1,158	45.2	-	-	-	-	1,158	45.2
計	2,563	100	-	-	-	-	2,563	100	-	-	-	-	2,563	100

10

考察

- ・本研究は、「憩いのサロン」事業への参加と認知症発症との関連を7年間の前向きコホートデータを用いて、離散時間ロジスティック回帰分析により、サロン参加回数が多い人ほど、認知症になるリスクが低いことを示した
- ・ポピュレーション戦略による地域介入研究では、RCTは不可能であり、「憩いのサロン」事業を活用した介入による、介護予防・認知症予防策の有用性を明らかにした
- ・しかし、選択バイアスに対応するには多変量解析だけでは十分ではないため、今後は、マッチングなどの手法も使用して、「憩いのサロン」事業参加の効果を精緻に検証することが課題である

12

2-2-6. 健康増進領域③

研究題目

小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査
(助成期間 2015～2017 年度)

研究代表者

羽山 順子

分担研究者

安部 基幸、赤岡 美津子、大浦 智子

研究目的

大学生の休学、留年、退学の背景因として、学生の精神健康不良が存在することは多くの研究から報告されている。また、専攻によって精神健康の推移は異なることも指摘されている。以上から、大学における精神健康増進対策は、大学の規模および現状に合わせた立案と実施が必要となる。本研究は、小規模私大における精神健康増進対策立案のため、学生の精神健康について実態調査を行うものである。すなわち、1) 学年および学部別の精神健康の特徴、2) 進級に伴う精神健康の推移、を明らかにすることを目的とする。また、予算も資源も限られる小規模私大でも運用可能な3) 費用対効果の高い調査システムの構築、も目的としている。

小規模私立大学で運用可能な 調査システムを活用した、 大学生の精神健康の把握と支援体制の 構築に向けた基礎的検討

リハビリテーション学部 羽山 順子
リハビリテーション学部 安倍 基幸
経営学部 赤岡 美津子
リハビリテーション学部 大浦 智子

1

背景：休退学・留年率の概要

- 全国国立大学の休退学・留年率(内田、2014)
 - 休学率2.72%(男子2.92%、女子2.33%)
 - 退学率1.32%(男子1.62%、女子0.75%)
 - 留年率5.45%(男子6.71%、女子3.1%)
- 専攻によって休退学・留年率は異なる(同上)
 - 休学:文系男子(3.58%)、文系女子(2.80%)
 - 退学:理系男子(1.86%)、文系男子(1.48%)
 - 留年:文系男子(7.63%)、理系男子(6.77%)

2

背景：精神健康と休退学・留年

- 主な休退学理由(内田、2014)
 - アパシー、学業不振(35.8%)
 - 他学部への進路変更・留学(27.4%)
- 休退学・留年率の背景に精神健康不良、
大学生活不適応があるとされる
 - 1-2年時の精神健康不良者はその後も精神健康が
不良(立森ら、1999)
 - 精神健康不良者はない者よりも退学願望を有する率が
高い(佐藤、2014)

3

問題

- 精神健康と関連する要因
 - 入学志望動機
 - サークル所属、学業における有能感
 - 友人関係の良好さ
- 大学の精神健康増進対策は、大学の規模および
現状に合わせた立案と実施が必要
- 本学学生の精神健康はどのようになっているか？
- どのような要因が半年後の精神健康を予測するか？

4

本研究の目的

- 本学に在籍する大学生の精神健康の実態の検証
 - 学年および性別の精神健康の特徴
 - 性別や学部などの基本属性、
およびサークル加入などの社会的因子が
精神健康におよぼす影響の検討

5

対象者と調査時期

- 対象者
2015年4-9月に本学に在籍していた学生
(留学生ビザの学生を除く)
 - 調査時期
 1. 2015年4月 前期オリエンテーション
 2. 2015年9月 後期オリエンテーション
- オリエンテーション時に配布、その場で回答を得て
回収した

6

評価尺度

A. UPI学生精神的健康調査

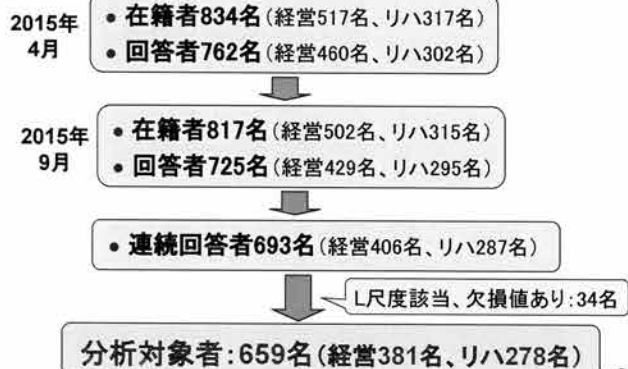
- 大学生の精神健康問題スクリーニング・テスト
- 全60項目の自記式質問紙、「はい/いいえ」で回答
- 身体症状と抑うつを測定、カットオフポイントあり
- L尺度(虚偽尺度)あり: いい加減な回答を識別

B. 基本情報

- 性別
- 学部、学年
- 入学志望動機
- 学内のサークル参加、学外のサークル参加
- アルバイト従事
- 住居形態

7

調査手続き



8

分析方法、倫理的配慮

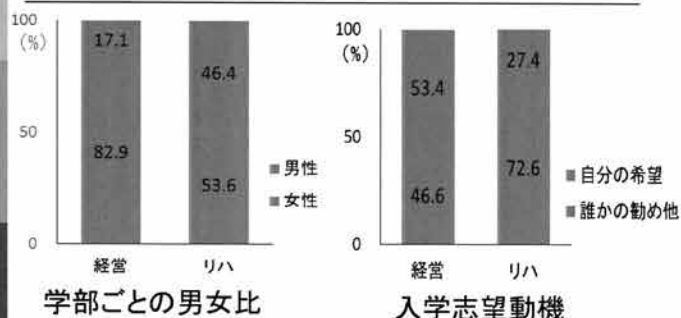
□ 分析方法

- 学内外のサークル参加、精神健康など: χ^2 検定、t検定
- 半年後の精神健康を予測する要因の検討:
ロジスティック回帰分析
- 目的変数: 半年後(9月)の精神健康
- 説明変数: 性、学年、4月の精神健康、入学志望動機、4月の学内外サークル参加、4月のアルバイト従事

□ 倫理的配慮

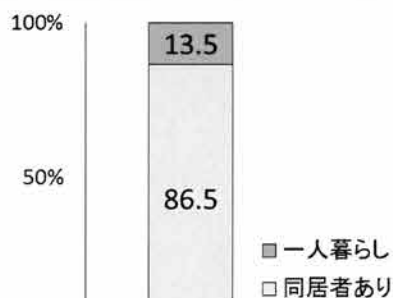
- 調査に際し、調査の趣旨と利用を書面で説明、同意が得られた対象者のみ回答
- 星城大学倫理委員会の審査・承認を得た(2014C0022)

対象者の属性、入学志望動機



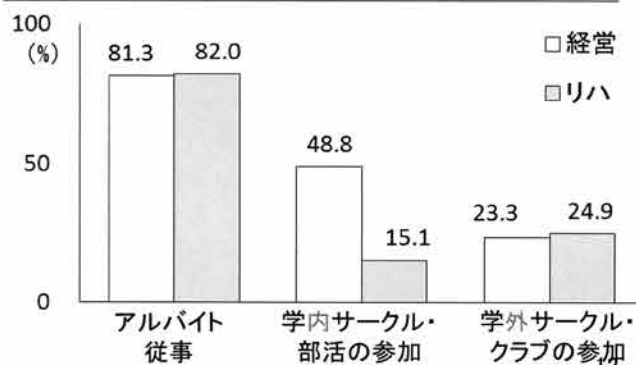
10

住居形態



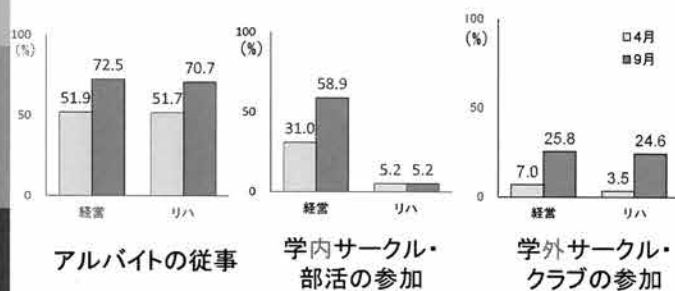
11

アルバイトの従事、サークル加入 (2年生以上: 4月時点)



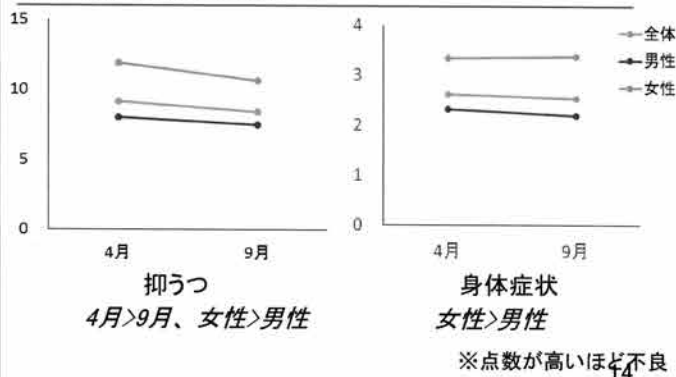
12

アルバイトの従事、サークル加入 (1年生：4月から9月の変化)

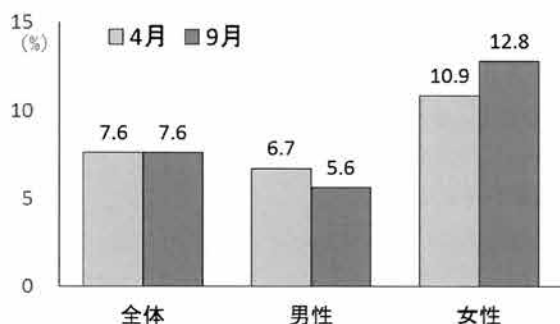


13

精神症状の変化 1



精神症状の変化 2: 「精神健康問題あり」の割合



15

半年後の精神健康を予測する要因 (経営)

4月の状態	N	%	OR	95%信頼区間	
精神健康問題あり	28	7.8	205.0	41.1	1021.3 **
自らの希望で入学	167	46.6	0.4	0.1	1.6
学内サークル不参加	209	58.4	0.8	0.2	3.1
学外サークル不参加	295	82.4	0.3	0.0	1.9
バイトをしていない	105	29.3	5.0	1.1	22.0 *
女性	61	17.0	6.0	1.3	27.7 *
2年生以上	231	64.5	1.4	0.3	5.9

N=358, * $p<0.05$, ** $p<0.01$

16

半年後の精神健康を予測する要因 (リハ)

4月の状態	N	%	OR	95%信頼区間	
精神健康問題あり	18	6.9	56.0	13.9	226.3 **
自らの希望で入学	189	72.1	0.4	0.1	1.4
学内サークル不参加	230	87.8	5.2	0.5	56.8
学外サークル不参加	206	78.6	0.9	0.2	3.4
バイトをしていない	62	23.7	1.8	0.5	6.3
女性	120	45.8	1.5	0.5	4.8
2年生以上	208	79.4	5.9	0.6	54.9

N=262, ** $p<0.01$

17

まとめと考察 1

- 在籍者の約90%が回答
本学の実態を反映する回答が得られた
- 両学部共通の特徴: 85%が家族(親族)と同居、70%がアルバイトに従事(9月時点)
全国のバイト従事率(63.8%)より高め、経済的に余裕がない?
- 1年生における半年間の生活変化: アルバイト従事および学外活動参加の増加、学内サークル参加の増加(経営学部のみ)
入学後半年で、2年生以上と同等の水準に達する

18

まとめと考察2

- 抑うつは低下
- 女性は男性よりも身体症状、抑うつ共に高い
- 「精神健康問題あり」の割合は10%程度、半年後の割合に変化なし
- 半年後の精神健康を予測する要因：
経営は精神健康問題あり、女性、アルバイトをしていない
リハは精神健康問題あり
- 4月時点での精神健康が半年後の精神健康を予測する
経営：アルバイトをしていない学生は精神健康不調を有する
可能性

19

平成27年度 助成研究報告会

平成28年度 助成研究募集説明

科学研究費申請説明会

2-3. 平成 27 年度助成研究報告会

平成 27 年度元気創造研究センター 助成研究報告会の開催案内

平成 27 年度 元気創造センター助成研究として採択された研究 5 件と学部研究 3 件の報告会を 3 月 17 日、開催いたします。本学の研究活動の現状を把握し、更なる活性化を図るための催しですので、是非ともご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

なお、今回は第一部、第二部の構成とし、第二部は分野別に 3 会場に分かれて報告会を行います。いずれかの報告会にご参加いただき、活発な質疑をお願いできれば幸いです。

1. 日時・場所

平成 28 年 3 月 17 日(木) 10:00～12:15

星城大学本館 1201 教室、1203 教室、1204 教室

2. プログラム

(1) 第一部（第一会場：1201 教室）

10:00～10:05 挨拶

雨宮康樹

10:05～11:05 報告（発表 20 分、質疑応答 10 分）

座長 雨宮康樹

① 小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査

研究代表者：羽山 順子 （10:05～10:35）

② 学生のコミュニケーション技能向上に向けたプログラム開発と評価に関する研究

研究代表者：飯塚 照史 （10:35～11:05）

（休憩 5 分）

(2) 第二部（第一会場：1201 教室、第二会場：1203 教室、第三会場 1204 教室）

1) 第一会場：1201 教室

11:10～12:15 報告（発表 20 分、質疑応答 10 分）

座長 太田 進

① 反転授業の教材としてのシリアスゲームの最適選択に関する研究

研究代表者：天野 圭二 （11:10～11:40）

（休憩 5 分）

② EU のエネルギー政策から学ぶ日本の電力システム改革への示唆ー中立・公平な電力システムを目指してー」（学部研究）

研究代表者：秋山 健太郎 （11:45～12:15）

2) 第二会場：1203 教室

11:10～12:15 報告（発表 20 分、質疑応答 10 分）

座長 鈴木 愛一郎

①地域経済活性化への取組み～特産品の開発と道の駅～（学部研究）

研究代表者：南川 忠嗣 （11:10～11:40）

（休憩 5 分）

② 経営理念の意味のマネジメントに関する理論的研究と調査実施への足掛かり（学部研究）

研究代表者：西村 知晃 （11:45～12:15）

3) 第三会場：1204 教室

11:10～12:15 報告（発表 20 分、質疑応答 10 分）

座長 富山 直輝

① 憩いのサロン事業を活用した認知症予防効果に関する研究

研究代表者：竹田 徳則 （11:10～11:40）

（休憩 5 分）

② 筋音図と筋電図を用いた嚥下関連筋機能評価と、その嚥下リハビリテーションへの応用

研究代表者：久保 金弥 （11:45～12:15）

発表者：研究分担者 伊東 保志

2-4. 平成 28 年度助成研究募集説明

平成 27 年 9 月 17 日「科研費獲得を目指す教員のための申請説明会」において説明

星城大学元気創造研究センター助成金 平成 28 年度公募要項

1. 助成の趣旨

元気創造研究センターは 1.「活力ある地域社会」をつくり「健康で文化的な市民生活」を実現すること、2.「行動力に富んだ学生諸君」を教育・育成することを目指し設立されました。この設立趣旨に沿って、当研究センターは、「地域社会や市民、学生が元気になる」研究を地域とともに推進し、地域社会や大学教育の発展・向上に貢献してまいります。

このような目的を達成するため、当研究センターの研究助成は、1.独創的で学術上意義の大きい研究で、かつ科学研究費の獲得につながる研究 2.教育の質向上につながる研究を積極的に支援してまいります。

2. 助成対象

- 1) 本学の教員を研究代表者とするグループ研究であること。個人研究は対象としません。
- 2) 単一学部の教員複数名でのグループ研究でも構いませんが、学際的な見地から、異なる研究分野を専門とするメンバーおよび異なる学部のメンバーからなる研究を優先します。
- 3) 研究者によるグループだけではなく、地域文化の発展に寄与する活動を行っている方々との共同研究を歓迎します。
- 4) 研究内容・計画・予算等の点において、実現可能性の高い具体的な研究であること。既に完了している研究については助成対象としません。
- 5) 助成の趣旨に沿った研究であり、今後の発展が望めるもの。

3. 助成金額および助成対象期間

- 1) 年間の助成件数および各々の助成金額は、元気創造研究センター運営委員会において決定します。一件ごとの助成金額は、研究内容によって異なりますが 50 万円を上限とします。1 万円未満は切り捨てとなります。
- 2) 助成対象期間は、平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月までの 1 年間とします。
- 3) 同一内容での継続助成は、最長 3 年間とします。継続を希望する場合は、1 年ごとに申請書を提出してください。元気創造研究センター運営委員会において改めて審

査、決定します。

- 4) 複数年度計画で申請し採択された後、予定の研究期間を満了することなく継続申請しない場合には、研究代表者はその理由を書面にて元気創造研究センター運営委員会に提出してください。

4. 助成金の使途費目

- 1) 助成金の使途は、研究目的を達成するために必要な費目とします。
- 2) 申請代表者や共同研究者が所属する組織の間接経費、一般管理費等は助成の対象としません。

5. 選考方法

- 1) 選考は、元気創造研究センター運営委員会が、所定の申請書類をもとに行います。申請書類以外の「参考資料」を提出いただいても、審査の対象にはなりません。なお、必要に応じて、研究代表者へのヒアリングを行う場合があります。
- 2) 選考は、元気創造研究センター運営委員会が以下の点を総合的に考慮して実施します。
 - ① 応募内容が元気創造研究センターの「助成の趣旨」（1. 助成の趣旨を参照）に沿っている
 - ② 研究内容が独創的である
 - ③ 予算も含めた研究計画が研究目的に合致している
 - ④ 学内外との共同研究である（2. の助成対象要件に該当すること）

6. 申請〆切

- 1) 公募期間は平成 27 年 12 月 1 日（火）から平成 28 年 1 月 15 日（金）17：00 までです。
- 2) 研究助成申請書に必要事項を記入してください。
- 3) 期限までに、上記を電子メール（PDF 変換したデータ）並びに書面（両面印刷押印済みのもの）で、総務・経理課科研等担当者（都筑）までご提出ください。
メールアドレス： jrpc@seijoh-u.ac.jp（元気創造研究センター宛て）

7. 助成の決定

平成 28 年 2 月下旬予定。選考結果は 2 月末までに各研究代表者に文書にてご連絡します。

8. 研究報告会での報告と報告書の提出

- 1) 採択された研究は、年度末に開催される研究報告会での報告が義務づけられています。

す。

- 2) 助成期間終了後に、元気創造研究センター運営委員会に成果報告書を提出していただきます。
- 3) 研究成果を数年以内に論文として報告していただきます。その場合、星城大学元気創造研究センター助成金(英文:Seijoh University Joint Research Promoting Grant)で行った研究であることを記載してください。

9. 個人情報の取り扱いについて

申請書にご記入いただいた個人情報は、研究助成選考以外の目的には使用しません。

10. 申請書記入上の注意

- 1) 申請は、当センター指定の申請書を用い、必ず枠内に日本語でご記入ください。研究助成申請書は、公募期間が近づいた段階で、メールにて送信します。
- 2) フォントは 11 ポイントとしてください(表、図の部分は除く)。
- 3) 「印」の指示がある欄には、必ずご捺印ください。
- 4) 必要事項はすべて申請書にもれなく記入し、必要書類外の資料は添付しないでください。**別紙参照などを用いた申請、申請書フォーマットやページ数の変更があった申請などは、原則として受理しません**ので、ご注意ください。
- 5) 記入上の注意事項
 - ① 採択研究への助成期間は 1～3 年間とします。ただし、2 年目以降の助成を確約するものではありません。前年度までの研究経過を審査したうえで助成継続の可否を決定します。
 - ② 研究の最終目標を具体的に明記してください。
 - ③ 研究終了後の成果発表の方法を具体的に記載してください(学会名、雑誌名等)。

平成 28 年度の研究助成を上記の要領にて募集、新規 1 件、継続 1 件、合計 2 件の応募があった。2 名の査読者による査読(1 申請書につき 2 名が査読)が行われ、1 件については採択、1 件は申請書の修正を申請者に依頼し、修正後の申請書を確認した上で、採択・不採択を決定することとした。

修正が必要とされた申請書は、修正後再審査が行われ、すでに採択されたものを含めて計 2 件の助成を採択した。

応募領域が 2 分野に改編されたのに合わせ、公募要領も全面的に変更された。

2-5. 科学研究費申請説明会

星城大学教員 各位

元気創造研究センター長
雨宮康樹

「科研費獲得を目指す教員のための申請説明会」開催のお知らせ

日本学術振興会の科学研究費助成事業（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）の応募に向けた学内説明会を下記の通り開催いたします。

今回は、「科研費申請書作成のポイントについて」の講演を名古屋大学大学院医学系研究科 近藤教授にお願いし、経営学部教員とリハビリテーション学部教員向けに、お話をさせていただきます。

記

日時：9月17日（水） 16：30～18：30（予定）

場所：1201教室

- 内容：(1) 開会挨拶 16：30～16：35
雨宮元気創造研究センター長
- (2) 科研費申請手続等の説明 16：35～16：55
総務・経理課 都筑
- (3) 元気創造研究センター助成金 平成28年度公募要領について
16：55～17：05
雨宮元気創造研究センター長
- (4) 講演 科研費申請書作成のポイント（仮題）
・経営学部、リハビリテーション学部教員向け
近藤 高明 教授（名古屋大学大学院医学系研究科医療技術学専攻）
17：10～18：10（予定）
・質疑応答 18：10～18：30（予定）

上記の内容、日程で学内説明会を実施した。

3. 広報活動

本学ウェブサイト内の【元気創造研究センター】ページについて、年度ごとの情報更新を行った。

<http://www.seijoh-u.ac.jp/labo/labo-genki/>

編集後記

平成 27 年度星城大学元気創造研究センター報を発刊する運びとなりました。

元気創造研究センターの設置は『活力ある地域づくりや健康で文化的な市民生活の実現、行動力に富んだ学生の育成をめざし、様々な研究的アプローチから「地域や市民が元気になる」研究活動を展開すること』を目的としています。

5 年目にあたる本年は、複数年度にわたる研究計画が 5 件進行しており、学内外での報告も含めて成果を発信できる段階になってきています。

また、2 か年計画となる連続シンポジウム『21 世紀型「ゆたかな社会」を求めて』を継続開催し、これまで、当センターが実施してきた講演会・シンポジウムをより充実させることができました。

今後も継続的に設置目的達成に向けて事業内容の充実とその成果の発信を地域・社会に向けて、積極的に行っていく予定です。どうかご支援いただきますよう、よろしくお願いいたします。

平成 27 年度星城大学元気創造研究センター 委員

	センター長	雨宮康樹
	副センター長	天野圭二
委員	石田隆城	太田進 齋藤貴之 富山直輝
		加藤一豊 室町律雄

平成 27 年度

元気創造研究センター 年報

平成 28 年 3 月 25 日印刷

平成 28 年 3 月 31 日発行

編集・発行 星城大学

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台 2-172

TEL : 052-601-6000 (代)

FAX : 052-601-6010

